

- (3) 肥後和男博士 神功皇后 アテネ新書 八八頁―九〇頁
(4) 横田健一氏 道鏡 人物叢書 六五頁

夏期セミナー発表要旨

古代人と言語

大久間 喜一郎

〔お断り〕 私に与えられた題目は、「日本の古代人と言語表現」という意味だろうと理解しているが、最初の案では、「人間と言語」であったという関係もあって、言語観の概略を前提として述べることにしたのだが、時間の関係もあり、結果から言ってお断りしてこの話を中心になってしまったことをお断りしておく。

一、言語観の概略

(イ) 人間と言語 一定の社会的約束に従って言語行為というものが存在する。その言語行為の目標は、思想・感情の伝達ということにある。それは、 \wedge 音声を媒介とした表現 \vee と \wedge 文学を媒介とした表現 \vee によって伝達が計られる。

音声を媒介としたものは、一定の時間と一定の空間とに束縛され文字を媒介としたものはそうした制約を受けないというのが在来の説であるが、今日ではディスクやテープの発達によって、そうした区別は考え直さなくてはならなくなった。

(ロ) 言語と表現 古い考え方によれば、言語という道具、あるいは言語という有機的な働きをするものが、人間存在の外にあって、そうした道具(言語)を利用して、人間が思想・感情を表現するのだ

- (5) この話の大筋については、東北大学文学部支那学研究室発行の「校本真報記」の本文及び翻訳を参照した。

としていた。そして、そうした表現の中で、聴衆乃至読者に感動を与える種類のものが文学であった。

しかし、言語と表現をこのように分けることは、言語を、絵画における絵具、音楽における楽器と同じ位置に置くことであって、言語が個人と密着したものであり、個人々々によって言語表象に違いがあるという根本事情を無視した考え方である。

○二十世紀における学説の傾向

徹底した素朴な合理観を基盤にもつ学説が究極に達したのは十九世紀と言ってよいであろう。それまでに普及したニュートン物理学の世界、ダーウィンの進化論の世界は、マルクス(1818―1883)の唯物史観あたりを皮切りに、フロイト(1856―1939)の精神分析学、アインシュタイン(1879―1955)の絶対時間の否定の上に立つ相対性理論などの出現によって、それらの単純な合理観の上に打ち立てられた学説は著るしく拡張されたと言ってよいかも知れない。一例を挙げれば、ベルグソン(1859―1941)の如き、精神と物質との連続を説くといった学説、科学上の時間概念に対立する体験的時間を主張するといった学説などが二十世紀になると出てくる。そこで、言語現象もそうした傾向の中から見直されてくるのは当然の成り行きとなってくる。

(イ) 表現と文学・美学者ベネデット・クロロチェ(1866―1952)にあっては、直観と表現は等しいとする。つまり、表現として客観化されないものは感覚にしか過ぎないというのである。而して、クロロチェにあっては表現は即芸術である。一方、国語学者時枝誠記に

よれば、言語は人間の実践行然としてのみ成立する。尤もこれには社会的約束としての言語行為の型を忘れていっているという批判もあるが、時枝の場合、文学は言語そのものでもある。今、クローチエと時枝とを並べてみると、文学が芸術であると同時に、言語は表現であるといった時枝言語学の主張が、無理なく引き出されてくる。

しかし、このような構想も更に細かい具体的な点になると、エドワード・サピアーのように、科学の基となっている思惟とは、言語的表現ではなくて、言語から衣裳を剥ぎ取った言語的過程であるという。また、表現の一回生起的性格ということから、クローチエは、文学における翻訳は不可能であると言ったが、サピアーは、実際には驚くほど適切な翻訳があるとして、普遍的で非言語的な文学と、他に移し得ない言語的な文学とが、文学の世界では交錯していると言っている。

二、古代人の言語

表現の場においてこそ言語の実態があるという近代的言語観は、文献に表現されたものこそ文学であると考えた過去の文献学派の文学観を当然反省しなければならぬ契機を含んでいる。但し、高度な芸術性という面を取り上げる場合は別である。とにかく、そうした意味で言えば、口誦文学は表現そのものとして、文学として当然扱われなければならない。

口誦文学として最初の出発をした古代の文学が、まず表現の場において、単なる伝達のための言語行為と異った面は何であったか。それは神を感動せしめるだけの力であったと思われる。折口信夫における文学信仰起源説の根本理念である。神を感動せしめる力は、後世次第に人間を感動せしむる力として働くようになった。これが文学成立の基本である。最初、神を感動させる力はどこから生じたか。それは言語行為の作爲的な技術としての言い廻しや発想方法からきたものではなかった。それはとりも直さず、言語そのもののもつ神秘的な力であったと考えられる。言語にそのような力があったと考えるのは古代人の思想である。旧約聖書の創世紀以後、わが国

の文献にも多くの証左がある。オグデン・リチャーズの「意味の意味」、イエス・ペルセンの「人類と言語」などにも強調されるところである。とにかく、言語のもつ神秘力を日本では言霊と言った。この言霊の本質こそ、言語行為の場において、それも口頭表現の場において発揮されると考えられたのである。その神を動かす言霊の思想が、呪文・呪詞となり、対象が人間を志向するところとなって文学と言われるようになったのである。

古代社会と言語

——「本辞」の背景——

緒方 惟章

言語表出の活動がその本来的な性質よりしても社会性を免れ得ぬものであることは申すまでもないが、ここでは所与のテーマ「古代社会における言語活動のあり方」を特に古事記生成の基盤をなす「本辞」の解明なる一点に絞り論ずることとした。

さて、古事記がその編纂の過程にあって「諸家の賈たる帝紀と本辞」とを資料としたことは上表文に照らして明らかである。よって、従来より古事記研究者の多くの関心が現行古事記の本文の検討を通じて「帝紀」「本辞」の本質の究明に向けられてきたことも当然と思われるのである。今、「帝紀」「本辞」に関して展開された従来の諸説の中主なものを示せば次の二系統に大別されるのである。即ち(一)古事記は「帝紀」及び「本辞」の二者の結合・補綴された形態をとる、(二)「帝紀」「本辞」の二者は必ずしも同一次元で論ずべきものでなく、従ってこの二者が結合・補綴せられて古事記を成立せしめたとは考え難いこと、の二系統である。前者には倉野説(「古事記序文註釈」)があり武田説(「帝紀攷」「古事記説話群の研究」)がある。この両説には大差はなく、歴帝の御名・皇居・治天下・后妃・皇子皇女・重要な御事蹟の簡単な記事・宝算・崩御の年月日・治世の年数・山陵に関する記事これらを帝紀と見做し自余を本辞とするものである。これに対し後者には徳田説(「原始国文学攷」)・